

「月の影 影の海」 小野不由美 新潮社

理系の教員としてふさわしくないかもしれないが、ファンタジー小説を紹介したい。

20年以上前にライトノベルとして刊行されたものだが、NHKでアニメ化もされたため、知っている人もいると思う。原作を読んだことがなかったらぜひ読んでみてほしい。ライトノベルとあなどるなかれ、本格ミステリー作家の作品らしく、不思議な世界の謎が徐々に明らかになる過程は読みごたえ十分で、世代性別を問わず楽しめることを保証する。

内容はざっと以下のような感じである。

平凡な女子高生である中嶋陽子が、突然謎の男に連れられて全く知らない十二の国の世界（ここから、本作に連なるシリーズが十二国記と呼ばれる）に連れてこられるところから物語が始まる。これだけだと、最近もよくある異世界転生ものと変わらないように感じるが、内容は比較にならないほどハードだ。

陽子は、言葉は通じるものの、何も分からない世界に一人で放り出される。訳も分からず人間に追われ、さらに次々と化け物に襲われ戦うことを余儀なくされる。助けてくれる人がいたかと思えば次々に裏切られる。「帰りたい」と泣きながらさまよううちに、身も心もボロボロになり、ついに自らも人を裏切り、見捨てることになる。

自分の醜さと対峙した陽子は、葛藤を乗り越えて成長する。成長することで世界が開けていき、やがて自分に課された役割を知ることになる。

実はファンタジー小説と見せかけて、少女の葛藤と成長の物語である。たしかに架空の世界の話であるが、抱える苦悩の本質は日本に暮らす我々と非常に似通っている。

「生きる力」という言葉が教育の場で使われるようになって久しい。普段死と無縁な現代の日本人にとって、「生きる」こともまた、あえて唱えなければいけないほどに遠く感じられるものになってしまった。死と隣り合わせの世界へと放り出された陽子は、まさにこのむき出しの「生きる力」を身に着けていくのだが、それによって逆に「生きにくさ」の本質は、日本でも十二国の世界でも大きく違うものではないということに気付く。

物語の転換部において、「世界にたった独りで、助けてくれる人も、慰めてくれる人もいない」と感じて絶望に追いやられた陽子は、「胸を張って生きることができるように、強くなりたい」と決意することになる。その葛藤は、現代日本に生きる若者たちにも決して遠くない内容である。

世間との軋轢に悩み、「生きにくさ」を感じる学生の間に、ぜひ触れてみて欲しい物語である。